

踊り場のある階段

田中 園枝

進藤社長の取材はつつがなく終わった。町工場から世界のトップメーカーへ、波乱万丈の人生は読み応えのある記事になるだろう。だが、何か物足りない。

そんな時、私は応接室の壁にかけられた一枚の絵に気づいたのだ。純粹階段と云うのだろうか、空中に階段だけが描かれているのだが、とんでもない長さの階段だ。

「その絵、ちよつといいでしょう」

社長は、懐かしそうに絵を見つめた。

「パリに行った時、ちよつと変わった絵描きに会ったんだ。何て言うか、目の前の客を描くんだよ」

「似顔絵、ですよね？」

「いやいや。即興で詩を作る人、いるでしょう。そんな感じ。絵を買う気なんかなかったのに、彼に捕まっちゃった。絵が売れないと今夜の食事も困ると言われて、まあ良いかなって。彼はまずスケッチブックに下書きを始めた。階段の絵だけど、踊り場がなくて、ただ長い階段が雲の中に続いていた。ところが、彼が急に手を止めて、僕の顔をじっと見た。彼は言ったよ。『踊り場は、あつた方が良くと思うんだけど』と。正直、僕はどきっとした」

「踊り場ですか」

「踊り場のない階段って、当時の僕を見抜いた言葉だった。一息つく場所がなければキツクなって、途中で上るのを諦めてしまう。失敗した時、引つかかる場所も無く一気に下まで転がり落ちてしまう。そういう若造の危うさを彼は見抜いて、警告してくれたんだな。不思議なものでね、忠告めいて言われたら余計なお世話だと思っただろうけれど、彼が気弱な感じで言うものだから、僕もつい素直になっちゃった。『そうですね、踊り場はあつた方が良い』。それで、完成したが、この絵。それから五十年間、仕事が行きづまるたびに、僕はこの絵を見てきた。今は踊り場なんだって、言い聞かせながらね」

進藤社長は私を見送ってくれながら、いたずらっぽく笑った。

「来月またパリに行くんだけど、彼、今も現役ですよ。ぜんぜん変わらないんだよ。実は、天使とかなのかなあ」